

さくら第542号

令和 7年2月

さくら

発行所 さくらそろばん
発行者 平瀬重雄
春江町境 17-7・Tel.51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp

ななごもこにからし
 本丸でもてはさる
 本丸でもてはさる
 たのしいから
 本丸でもてはさる
 つかねないから
 つかねないから
 つかねないから
 つかねないから
 さわやかだから
 みつと

『九九のおもしろい歴史』

かけ算九九の歴史は古く、中国の春秋時代の紀元前700年ごろには九九八十一から始まる九九が使われていましたが、5世紀には1×1から始まるようになりました。

日本へは平安朝の970年ごろの貴族の子ども用の書物「口遊・くちずさみ」には九九八十一から始まっています。

奈良時代の万葉集には、三五月と書いて「十五夜・望月・もちづき」と読ませ、16と書いて「し」と読むような歌がありました。

江戸時代、かけ算は今の九九を使い同じ数と小さい数から大きい数へ唱えます。二の段は、二二四。二三六。二四八、二五〇。二六十二。二七十四。二八十六。二九十八。……七の段は七七四十九、七八五十六、七九六十三。八の段は、八八六十四、八九七十二、九の段は九九八十一だけです。

わり算は「帰除法(きじょほう)」であり、割り声というわり算九九を使い、大きい数から小さい数を唱える方法でした。10÷2は、実の10を中央に置き、法の2を左に置く。2と1を見て、二天作五(にいちてんさくのご)と暗記した割り声で、1を5になおし5という答えが出ます。

10÷3は、三一三十一という割り声で、1を3になおし、その右の桁に1を置く。答えは3とあまりが1となり、考えなくても答えと余りがすぐに分かるようになっていきます。

しかし九九を覚えるのが大変なことから、昭和13年に文部省の図書監修官の塩野直道は長さが17桁、5玉1個、1玉4個、定位点は日本の名数法に合う4桁区切りのそろばんを「児童用そろばん」として制定しました。

その後民衆の声により3桁区切りへと移行し昭和16年から筆算に先行して3年生からそろばんを学習するようになり、教科名が従来の算術から「算数」に変更されました。

小さな数から大きな数になるところだけ覚えるので45算しかなかったのです。これだと楽ですね。今のように81算も暗記しなかったのです。2×3も3×2も答えが同じだから、小さな数から大きい数を唱えるニサンガロクで統一していました。

ところが大正14年(1925年)に国定教科書のなかで九九は今の81ヶとなり、筆算に役立つようになりました。

それまでの計算方法では、1524×3をするときには、1の位はサンシですが十の位はニサンとなり、百の位はサンゴ、千の位ではインサンとなりいくつもの段の九九を考えますが、81ヶあればすべて3の段だけでできるから計算が速くなります。

しかし、2×3は2の3倍なのか3の2倍なのかをはっきりさせる必要が出てきたので、当時の文部省は2×3をサンニと唱えることにしました。つまり2×3は3の2倍という意味で。これは、筆算の形式を優先させたのです。

小学校の先生方は81ヶになるのは仕方ないが、2×3は2の3倍で指導したいと考えました。2×3=2+2+2で2の3倍ならば子どもたちも九九の意味が分かりやすくなります。

昭和10年(1935年)、新しい国定教科書が発行され緑表紙教科書と呼ばれ外国からも高く評価されたといえます。この教科書のなかで2×3は2の3倍と定められ、教える順番もそれまでの2の段、3の段、4の段というのではなく、子どもが理解しやすいように2の段、5の段、3、4、6、7、8、9の段となってきました。

九九といえばかけざん九九ですが、そろばんの段位応用計算では、正四角形の面積から1辺を求める開平では半九九。立方体の1辺を求める開立では三倍九九を用います。かけざん九九の成り立ちには長い長い、そしておもしろくて楽しい歴史があります。

いくたびも雪の深さを尋ねけり
季語||雪
正岡子規
病床で見られず、庭に降り積もる雪の深さを私は何度となく尋ねている。